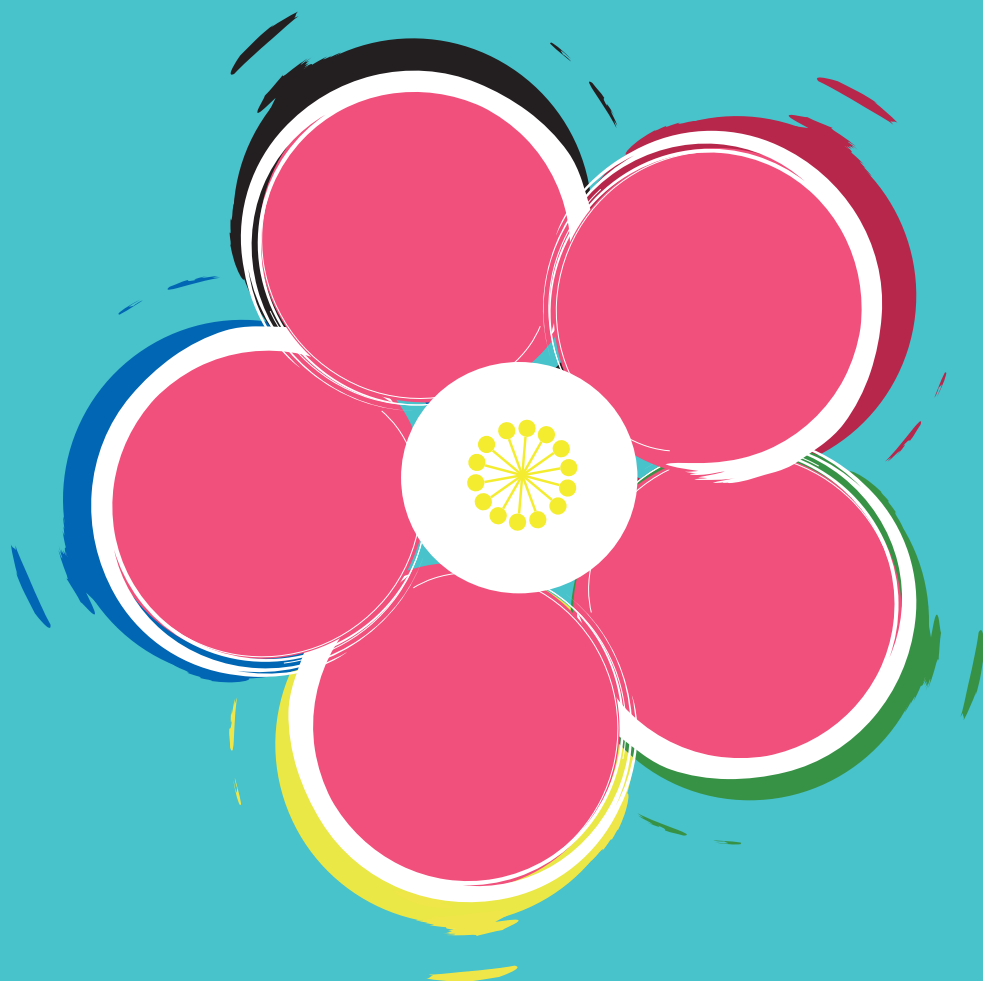


子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2021年1月 NO.219



【もくじ】

- 2～3 『埋没』四国ツアーを終えて…井場景子
- 4～5 台湾桃園日記―東北の風吹く中の民意…吉尾 寛
- 6～7 のいち動物公園は間もなく開園三十周年…多々良成紀
- 8～9 かつて妖怪は身近にいた。…田辺リカ
- 10 落語家のお正月…桂 九雀
- 11 「アンテナ」詩のボクシングとの出会い…下尾 仁
- 12～13 高知市文化振興事業団10～11月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

『埋没』 四国ツアーを終えて

井場 景子



お盆と正月の毎年二回は夜行バスで高知に帰っている。しかし、今年はコロナの影響で泣く泣く帰省を諦めた。実家の家族を守るため。お墓参りとよさこいを見に帰らないなんて何年ぶり、いや何十年ぶりだろうか。とても物足りない夏だった。

劇団 TRASHMASTERS の『埋没』の出演（客演）依頼を頂いたのは二〇一九年の秋。「来年『埋没』で四国を回るんだけど出ない？」と作・演出の中津留章仁さんに経堂にある食堂で突然オファーを頂いた。この作品は二〇一八年の初演で方言指導をした作品で、稽古途中から何度か参加し、全キヤストの台詞を録音、稽古中はイントネーションをチェックして、俳優に指導した。

それが今回は「俳優」として、生まれ故郷で、しかも土佐弁での参加。こんな三拍子揃う事なんて、

夢じゃないだろうか、口に出したら消えちゃうんじゃないだろうか、とにかく嬉しかった。親や兄弟、友達に見てもらえる、喜んでもらえる、という気持ちで沸々と湧いてきた。よく考えたら、高知の知り合いに芝居を見てもらった事がない。友達にも「楽しみにしてる」と言ってもらい、より一層わくわくしてきた。

そして二〇二〇年。三月に TRASHMASTERS の公演があった。コロナの影響で初めは客数も伸び悩んでいるとのことだったが、その芝居の好評が口コミで広がり、中盤から連日満席になっていた。本当に素晴らしい芝居で、私は一週間は余韻に浸っていたと思う。これぞ演劇の醍醐味。TRASH の芝居は特にその感覚が好きで十年ほど観に行っている。「ああ、この劇団の公演に劇団員の人たちと出演出来るんだ

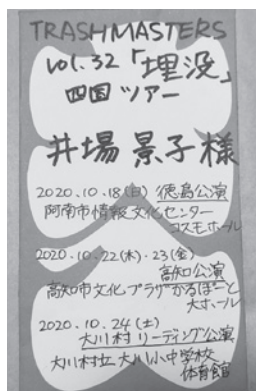
あ」と嬉しさが込み上げてきた。劇場からの帰り、中津留さんから「三月中に秋のツアーをするかどうか（高知から）連絡がくるからもう少し待って」とのことだった。その時の私は、秋には（コロナは）大丈夫だろうと呑気に考えていた。

しかし三月中に連絡はなかった。それどころか四月に入ると緊急事態宣言が出され、都内の劇場は全閉鎖。至る所から公演の「中止」や「延期」という悲しい連絡が届くようになった。『埋没』のことも徐々に「残念だけど仕方ない」と自分に言い聞かせて諦めた。演劇や映画は集団表現なのに人と会えない。出歩く事さえ最小限。これからどうなるんだろうと悶々とする日々。五月に入り緊急事態宣言が解除された頃、突然、中津留さんから四国ツアー出演の再オファーの連絡を頂く。もう諦めてい

たので「え？やるの？やれるの？」と驚いた。そこから感染者が減ったのもつかの間。七月から増える一方。感染者の多い東京からの移動は他県から嫌がられ、高知への帰省も諦めた。愛媛公演が中止と連絡があり公演自体なくなるかもしれないと思った八月。高知で『埋没』のCMが流れ始めたと聞いても公演をする事が信じられなかった。

そして九月になり、稽古スケジュールが届いてやっと現実味を帯びる。舞台は稽古期間が長いのだが、今回は本読みから始まり公演が終わって帰郷するまで一カ月という過密スケジュール。稽古期間はたったの二週間。その中で方言指導も同時進行していった。とにかくコロナには慎重に。検温・消毒、マスク装着での稽古。

この劇団は、演出が細部にまであり稽古は芝居時間よりダメ出し時間の方が長いのが特徴。皆で悩



み焦る日々。早く応えようと切磋琢磨する。全員PCR検査が「陰性」で今日が最終稽古という日もダメ出しの嵐。この状態で四国に向かって大丈夫なのか、という程だった。

四国ツアーの始めは徳島。セツトが立ち上がり、場当たり（芝居に音響照明を合わせていく）をする。ゲネプロ（本番と同じ状態のリハーサル）からやっとマスクを外した。ゲネ終わりで早速稽古。まだまだ中津留さんの要求は続く。一つひとつの言葉に最適な読解や表現があり、本当に細かいのだけど、そのほんのちよつとが違うと全く違った届き方をしてしまう。その細部を掴む事がとても難しく、皆でギリギリまでもがいた。



たった一度の徳島公演が幕を開け、そしてカーテンコールを迎えた時、お客様からの拍手がまるで地響きのように身体中に伝わってきた。あまりの感動で涙をこらえるのに必死になった。「ありがたい！」その思いでいっぱい、高知公演への自信にも繋がった。

かるぼーとに入ると徳島公演のダメ出しから始まった。まだまだ良くなる、そう信じてこだわっていく。すると、予約数が増え高知公演は二回とも二階席を開放すると聞いて俳優たちの熱も上がった。親や知り合いに観てもらえる。今までに感じた事のない種類の緊張。さらに憧れのTRASHの芝居で観てもらえる嬉しさもある。高知で高知が舞台の芝居が出来る。どんな感想が聴けるのか楽しみ半分こわいの半分だった。

あつという間に幕が開け、土佐弁での芝居を温かく見守ってくれているような感覚に包まれる。安心して芝居に集中出来た体感だったが、演出には「緊張して芝居に力が入っていた」と言われた。きつと無意識だったと思う。高知公演のカーテンコールではサプライズで急に話をする事になり、何を喋ったか緊張で全く覚えていない。



前列左から2人目が筆者

ただ舞台から見えるお客様がみんな親戚のように温かく受け止めてくれた事に感動したのは覚えている。高知で生まれて良かったと心から思った。

最終日はいよいよ『埋没』の物語の舞台となった大川村。朗読公演の予定だったが、簡易セットを立てて通常の公演を行った。村に一つしかない小・中学校の体育館には村の住民の三分の一以上が集まってくれた。初めて演劇を見る方々が大半。ヒリヒリしたという感想を多く頂いた。肌感覚が近づいて思い当たる事が多くどう感じているかわからなかったらしい。大川村でしか聞けない感想はとも面白く興味深かった。

旧村役場がある辺りを大川村集

落活動センター「結いの里」から眺めて、その大自然の貫禄とキラキラした川の奥底にある昔の村に想いを馳せた。

高知で生まれた事も、東京に行つて演劇を始めた事も、何だかに続けてきた事も、いろんな人に出会ってきた事も、全てに意味があると肯定してもらえた気がした。感謝で溢れている。そして、「演劇」の力を改めて体感した公演だった。

（注）「ダメ」というのは俳優の演技を否定する事になるのでTRASHでは「ノート」と呼ぶ。

いば きょうこう

高知市生まれ。

大学卒業時に演劇を始め、二〇一〇年「ギンノキラク」（主演）が池袋演劇祭で【大賞】受賞。二〇一一年より堺雅人所属の「東京オレンジ」に入団し、下北沢を中心に活動。二〇一七年にフリーになり、映像・声の仕事開始。Netflixアニメ「スパイキッズとくべつミッションシーズン2」にレギュラー出演。また、小中高校コミュニケーション授業において、演劇を取り入れたドラマケーションファシリテーターとしても活動中。

台湾桃園日記

―東北の風吹く中の民意

吉尾 寛

高知で冬場の季節風というところと西
北風だが、台湾では東北風（東北
季風）である。私は二〇一九年八
月から二〇二〇年七月まで桃園市
（台北市の西南）の開南大学で教
鞭をとった。そのキャンパスでも
十月初めから時折強い東北の風が
吹くようになった。東北風が吹く
時の雨は、実に冷たい。テレビの
天気予報の予報士は「リヤンリン
（涼淋）、リヤンリン」と繰り返
し、冷たい長雨を警告する。「二
月頃は骨まで冷える感じ」と知人
は言う。台湾になぜ必要なのかと
思うダウンジャケットを着る人の
気持ちがかかる季節でもある。

その東北風厳しい二〇二〇年一
月、今でも鮮明に憶えている大き
な動きが台湾で起こった。四年に
一度行われる総統、副総統並びに

立法院委員（日本の国会議員に当
たる）の選挙である。コロナ禍の
中でアメリカの大統領選は直接投
票だけでなく郵便による投票も実
施した。私は、この投票行動に対
する拘り——国民一人ひとりが自
分の手で政治家、国の代表者を選
ぶ投票の意味、また社会がそれを
大変重要視することを、台湾で痛
感した。

その年一月十二日夜、私は宿舍
の部屋から恩師に興奮したタッチ
でメールを送った。

《先生・夜、突然メールをお送
りし、失礼いたします。今も台湾
のテレビでは、蔡英文氏、民進党
が勝利したことを伝える番組が流
れています。私、外国人ながらこ
の二日やきもきしながら過ごして

おりました。実は同じく開南大学
に來ている日本人の若い教員と、
国民投票というものを実感する貴
重な経験をしました。

一月十一日の投票日当日は、私、
宿舍の方から「投票開始の朝七時
前に投票所に行ったらすでに長い
列が出來ていて、半分ぐらいは若
者だった。こんなに朝早く若者が
投票に來ることは前回はなかった
ように思う」と聞きました。自分
も十時過ぎに投票所の小学校に行
ってみました。正門などに大きな
看板などはありませんでしたが、
出口調査も含めて日本と変わりな
い静かな投票の様子でした。ここ
ろが、戻るとまた「台湾では開票
は公開で行なうので、誰でも見る
ことができる、見に行ったらどう
か」と言われ、結果、若い日本人

の同僚と再び小学校に行くことに
しました。十五時半に小学校の校
内に入り（別に注意もされません
でした）、十六時の投票終了時間
を待ちました。投票所は、一年生
二十人ほどが学ぶ教室に構えられ、
近くには「写真撮影、スマホの持
ち込み禁止」と書かれた紙が貼ら
れていました。朝からニュース等
もLINE、Facebookなどの勧誘行
為等は処罰されますという字幕が
流れていました。

しばらくすると「中に入ってく
ださい」と言われました（この時
もまだ外国人でもないのかと不



開南大学キャンパスの秋

安でした）。私たちは教室の後の方に設けられた児童の椅子に座りました。近くに三名の警察官が同席していました。因みにここでの開票は投票者約一千人規模のもので、小選挙区比例代表並立制の下、総統・副総統、立法院委員（先住民委員を含む）、政党別開票作業と票の確定は、全て十二人（一人責任者）の選管委員によって行われました。委員の年齢は二十代から四十代、十名が女性でした。

責任者が我々に向けて「これから投票用紙の入った箱を開けて開票作業を行います」と宣言。一人又は二人がプラスチックの箱から用紙を一枚ずつ取り上げて別の一人に渡し、受け取った人が「（例えば）三番（＝蔡英文と副総統候補者名記載）一票！」と大きく声を上げ、用紙の押印部分を我々に分かるように示します。そうするとさらに別の人が、同じく「三番一票！」と言いながら黒板に張られた赤い紙（三番 蔡英文と副総統候補者名掲示）の下に長く垂れ下がった短冊状の紙（二十のマス目あり）に一筆を書き入れます（日本と同じく「正」の字を作る）。無効票らしき票紙が出てくるとその都度責任者が判断して処理しま

す。短冊に「正」が一杯なると、次の短冊を貼りますが、その時それまでの票数を確認します。

全ての開票作業が終わって時計を見ると十八時半になろうとしていました。我々以外に延べ七名ほどが作業の様子を確認していました。ただ最初から最後まで居たのは我々だけでした。数が確定した投票用紙は幾つかに分けられそれぞれ高さ数十センチメートルの紙袋に収められました。その後どうなったかは不明です。

凡そ三時間ずつと一人で「○番一票！」と言い続けていた年若い委員は、時々水を飲んでいたものの終わった時（枯れた小声で）「疲れた！（累死）」と叫び声をあげました。私たち教室の原状復帰の作業を手伝って、全ての作業が終わった時に選管委員の方に「ご苦労さま！」と申し上げましたが、逆に「あなた方こそずーっと開票作業を見ていて疲れたでしょ

う？」と言われてしまいました。宿舎に戻る前に近くの食堂に入った時（十九時頃）、蔡英文、民進党圧勝のニュースがテレビで流れていました。》

聞けば、桃園市では一九七七年戒厳令の下、小学校の投票所で行われた不正投票に多くの市民が憤慨して警察分局を包囲し、死者も出る中壢（地名）事件という大きな事件が起こった。開票の公開は、他の地方より強い公正への民意を表しているのかもしれない。

しかし私は、東北の風吹く台湾で新しい世代の民意の断片を幾つも目にした。投票日の一カ月ぐらいい前から有力政党のCMのような



投票日の風景

選挙広報が、頻度、放送時間とも日に日に増えていった。内容も文字情報に止まらず「私は○○を支持する」という人が出てきて、そこには業界を代表する会長から若い夫婦、農村の年配の婦人まで登場した。片や、アメリカ、日本などから若い人たち（留学生等）が多く帰国し、郷里で投票した。開南大学の親しい「首投族（初めて投票する人）」も小声で「お父さんと違う考え」といい実家に戻って行った。結果は上述のとおり。

ただ、比例代表枠の政党の選出においては二大政党間の得票差は総統選ほど無かったといわれている。実際、自分が見学した開票場でも民進党以外を選んだ人が一定数あった感じだった。そして今回の選挙では政党の数が十九に上り、政党の名前を連ねた投票用紙の長さが一メートル近くになり、選挙史上最長として話題となった。台湾の知人はこう言う——「台湾人はいかなる政党であっても独裁は好まないということだ」と。

よしお ひろし

一九五三年 安芸郡安田町生まれ。
高知大学名誉教授

のいち動物公園は 間もなく開園三十周年

多々良 成紀



高知県立のいち動物公園は平成三年十一月三日に開園し、令和三年には開園三十周年を迎えます。

来園された親子連れのお父さんお母さんから「私も小学生の頃、のいち動物公園のサマースクールに参加させてもらいました」とのコメントをいただくことがあり、いつのまにか長い年月が経過したことに気付かされます。飼育展示される動物たちは、寿命の長いものを除いてほとんどの種類で世代交代をしています。園内の樹木も大きく育ち、森のように繁って「自然の中の動物公園」としての風格を漂わせています。

さて、みなさんはこれまで何度、動物公園や動物園を訪れたことがあるでしょうか。まずは幼い時に家族に連れられて、次いで小中学

校の遠足で、そして大人になって我が子を送って…というふうに、人生の中で少なくとも三回は訪れると言われてきました。近年、動物公園にはレクレーションの場をはじめ、環境教育や生涯学習の場の保存の場など多くの社会的な使命を託され、利用者も子どもから大人、高齢者まで対象は広がってきていますので、今まで以上に

何度も訪れたくなる、そして全世代が楽しみながら学べる施設であることを目指して努力しています。

最近、当園が世間で最も話題となったことは、世界最大の閲覧数を持つ旅行口コミサイト、『トリップアドバイザー』での評価だと思っています。このサイトの「日本の動物園ランキング」で、当園は二〇一八年にいきなり二位、二〇一

九年に一位、そして二〇二〇年には水族館も含めた「日本の動物園・水族館ランキング」でも一位になりました。このランキングは、入園・入館者数の多さではなく利用者の満足度が主な評価ポイントであったようで、口コミを寄せられた方々が当園を高く評価して下さって本当にありがたかったです。

評価していただいた点としては、まず公園内が自然豊か、そして檻や柵のない広々とした展示場で動物たちがいきいきのびのびとして見えるということがあります。開園以来、「人も動物もいきいきと」をコンセプトに掲げ、動物たちの生息環境を再現した「生態的展示」を全園的に取り入れて三十年近く守り育ててきた、それが今、トリップアドバイザーという眼鏡を通し

て再評価していただいたということになります。

それからハシビロコウやカワウソなど個性豊かな動物たちが見られることも評価していただきました。パンダやコアラ、ゾウ、ライオンなどいわゆる花形動物はいなくても、脇役のように見なされてきた動物種でも、しっかり展示してその姿や行動を見てもらえれば、興味を持ってもらえる、ファンになってももらえるということです。



サバンナ大展示場は背景の山林と一体化し、キリンやシマウマの広大な生息環境をイメージさせる。



人気上昇中のハシヒロコウ

近年、世間では撮り鉄やダムカードなどで知られるように様々なものを対象としたファン層ができていますが、動物園動物の世界でも動物ファンが対象とする「お気に入り」動物の多様化が進んできているように感じます。レッサーパンダファン、ハイエナファン、ビントロングファンなどなど。お気に入りの動物を見にカメラを担いで全国の飼育園に足を運び、個体の名前はもちろんのこと特徴、性格、生い立ちから近況にまで興味は及びます。またSNSなどを通じて同じ動物種のファン同士が繋がっている様子も窺われます。こうして多くの動物種にスポットライトが当たることは、花形動物を展示することができない動物園にも話題提供や集客のチャンスが生まれますし、生態系や生物多様性の理解にも繋がり、実に喜ばし

いことです。

今日、私たちが生き物や動物たちと直接かかわる場面は減ってきています。生活スタイルの変化などからペットの代表格の犬を飼育する家庭は少なくなりましたし、学校では安全や衛生の問題からウサギやニワトリなどの飼育動物が姿を消しつつあります。そうした中で動物公園は、いろんな動物たちと出会える貴重な場所になります。動物公園の強みは直接、動物たちを、その生活や行動、生態も含めて見られることです。確かにアフリカや東南アジアなどに暮らす野生動物たちをテレビやネットなどでも見ることはできますが、その動物の大きさ、動き、声、匂い、そして臨場感というものを「直接的」に「感覚的」に見ること識ることはできません。そうした動物の「本当の姿」を見たり識ったりしてないと、動物たちのことを「本当に理解」することはできない、さらには野生動物や自然環境などに「心を寄せる」ことはできないと私は考えています。

昆虫の話でそうした



活発な行動が楽しいシロテナガザルのファミリー

「人と動物の共生」や「生物多様性」などについて皆さんといっしょに考えることができれば、それはとても素晴らしいことですし、一つの大きな目標でもあります。

来年は開園三十周年を記念して、様々な企画やイベントを計画しています。のいち動物公園三十年間の歩みを振り返り、そしてこれからの一步をみなさんと踏み始めていきたい。人生〇度目のご来園を心からお待ちしています。

たたら せいき

公益財団法人高知県のいち動物公園協会 園長

一九六一年 松山市生まれ。

高知県立のいち動物公園の開設準備段階から携わり、動物診療業務等を経て平成二十四年から現職。

好きなテーマは「進化」「頭骨」「ニホンカワウソ」「従軍ヒョウのハチ」。

かつて妖怪は身近にいた。

田辺
リカ

『幡多妖怪地図』

二年ほど前から取り掛かり、試行錯誤・軌道修正を繰り返しながら二〇二〇年夏に四万十漫画倶楽部が自費出版した幡多地域の妖怪分布図と紹介本のセットのことだ。四万十漫画倶楽部は、高知県四万十市で安倍夜郎先生・井上淳哉先生のバックアップのもと、五年前に漫画を描きたい人に描き方を教えるサークルとして相方と作った。細々と活動を続けていたが、ここに来てテレビや新聞の取材を何度も受けるようになった。そのきっかけが『幡多妖怪地図』だ。かつて幡多地域に生息していた妖怪は多かったようだが文献が分かれすぎてどれだけ多いのか把握できない。一目瞭然な地図は、作成してみれば「なるほど」が詰まった作品になった。多いのは河童・タヌキ・大蛇。かつて妖怪の目撃情報は発見者と共に新聞に載るような

時代もあった。編集してみて気が付いたが妖怪はとても身近にいたのだ。

妖怪地図作成の発端はサークルのバックアップをしてもらっている井上淳哉先生の「妖怪マップとかあったらおもしろくない？」なる台詞。地元にもつわる妖怪話がけっこうあることをメンバーの一人が語っている最中のことだった。それを本気で企画してみた。妖怪好きなメンバーが地道に各地の図書館に通い、データ収集を始めた。まとめるのが遅くなったのはテーマとか方向性が決まり切らなかつた為だ。なんとかカタチになったのは、昨年春に左古文男先生の妖怪原画展へのお誘いがあった後。このおかげで締め切りが決まり慌てて編集に舵をきった。編集をしながらも試行錯誤は続いた。はじめはデータをまとめて挿絵をメンバーに割り振り、漫画サークルの名

の下に紹介と挿絵の比率を半々にレイアウトすることだけを目指していた。集まるイラストに合わせサイズを変え、ページ数を増やして何度も書き換えるうちに方向性が決まってきた。

本をどう読んで欲しいか、どう扱って欲しいか。

編集後半、文章の添削をしていく。妖怪に焦点をあわせ、妖怪目線で統一してみようと思いつく。元々妖怪の話を集めてくれていたメンバーからのデータも妖怪側に立った解説が多い。しかし元の話が民話や昔話。人が主人公の人間目線の話ばかりなのだ。そんな昔話から妖怪のエピソードのみを抜粋する。まるでスピノフの物語のように人に伝わる話からそれる。それを逆手にとつて敢えて大事なエピソードを書かずに妖怪の事だけを書く。詳しく説明したい衝動に駆られたのは初めのうちだけだ

った。開き直ると共に「妖怪やそれにまつわる人に興味を持って調べてくれるといいな」と思うようになる。作りたかったのは『地図』なのだ。ヒントはたくさんある。これを持って人に聞いたり、図書館で調べたり、検索したり…そんな使い方をしたい。興味を持つきっかけになって欲しい。

趣旨がはっきりすると地図のイメージが出来、本の表紙のイメージも出来た。シンプルで分かりやすく、人を選ばないもの。地味でも目を引き、古さもアピール。和綴じっぽくしてみようと思いつくのは早かった。おかげで漫画とい



うより本として認識されたのか「手に取りやすい」と言ってもらえた。地元での売れ行きは好調だ。子どもが地元の昔話に興味を持ち、親や祖父母、近隣のお年寄りたちと会話がはずんで永く伝わっていく。それがなにより。この『幡多妖怪地図』を手に「孫に送る」など買い求めてくださるお年寄りの方を見かけるとニヤツとする。

幡多に区切ったのは思いつきだった。『地元』と設定して企画をスタートさせた。県西部くらいの感覚でいたが区切りが曖昧で落ち着かない。どうしたものかと観光地図を開き『幡多地域』という区切りに気づく。後々四十町が含まれてないことを残念に思ったが、ポリユーム的にもこれで良かったと思う。

各市町村のPRは最初から考えていたが、各自自治体の観光課にPR文章と写真の提供を求めることを思いついたのが遅かった。非常に短い納期での依頼に迷惑をかけてしまったが、結



左上が筆者

果充分なPRが出来たと思う。地元PRの成果は狙っていたがこの怒涛の売れ行きは予想だになかった。そもそも『同人誌』というジャンルの自費出版物なのだ。無名の、田舎の、漫画サークルの。誰がこんなに売れると思ったか。じつのところ出来上がったら売る事より献本のことばかり考えていた。縁のある漫画家の先生方、漫画関連の施設、利用した図書館、依頼した各自自治体。「学校の図書館にも置いてほしいな、地元四十町の小中高すべてだけあるかな」と共に主宰を務める相方に相談すると「市へ贈呈して配ってもらいましょう」と答えをくれた。市長との贈呈式が組まれ大事になったがそれもご愛敬。ダメ元で地元本屋に掛け合うと二つ返事で受

けてくれ、素敵なコーナーまで用意してくださった。なにより地元新聞の記者さんがとても積極的な取材で親しみのある記事を書いてくださった。初動でのこの記事の影響が大きかった。すぐに問い合わせが県内から寄せられた。

改めて、売ってくれる人・買ってくれる人の地元愛を実感した。

「見たよ」「読んだよ」と言ってくれる人がいて「祖父からこんな話を聞いたことがあった」「近所にこんないわれの池があった」など、今になって生の声が上がってきた。作る前に欲しかった物が今さらながらたくさん集まっている。しかしこれもキツカケがあったこそだ。『幡多妖怪地図』が世に出なければ、それすら無かった。呼び水とも言える。

これをまとめてまた本を出すのか？

それは未定だが、こうやって昔聞いた話を思い出したり、また誰かに伝えていく…これがもうすでに私が望んでいた最良の結果だ。先にも書いてあるが、本当に語り継いで欲しい。会話のキツカケになってくれることがうれしい。

そして『幡多妖怪地図』を知っ

てもらい、それを描いたのが『四十漫画倶楽部』だと認知され、四十漫画倶楽部に興味を持って絵を描きにきてくれる。この流れが理想だ。

主宰の私たちはメンバーの一生懸命をバックアップして、カタチにして、自信を持ってもらい、描く楽しさを知り、描くことを継続することを身に着けて欲しいと思っている。

今回は妖怪だったが、次は何のテーマになるだろう。

まんが王国・土佐のもとで今後も楽しく活動が続けていきたい。

たなべりか

一九七〇年 四十市（旧中村市）生まれ。

中村高等学校卒業。

四十漫画倶楽部を友人と二人で主宰。地元四十市で絵や漫画の描き方を指導。四十漫画倶楽部として地元PR漫画を描いている。

ホームページも自作。

<https://noisesub.jp/shimakula/top.html>

落語家のお正月

桂
九雀

私が入門した昭和五十四年（と言っても令和になった今や、何年前か計算できない。西暦一九七九年です）には、常打ちの寄席小屋はおろか、単発の落語会も、指折り数えるほどしかありませんでした。「こんな世界に入って、喰っていきけるんだろうか？」と不安に思ったものです。でも先輩たちは優しかったです。「若いうちは喰われへんけど、五年、十年やっつうちに喰えるもんや。」「へえ、仕事が増えるんですか？」「そやない。食べる量が減ってくるんや。」現場がなければ、同業者が顔を合わせる機会ありません。なので、元日のご挨拶と、それに先んじて十二月十三日に行われる「事始め」という儀式（説明が長くな

るので、各自お調べ下さい）で、

一門が勢揃いするのは貴重な時間でした。事始めには、弟子一同が連名で鏡餅を師匠のお宅へ持参します。そして元日には、師匠からお年玉を頂きます。鏡餅代の割り勘（わずかなもんです）が、二十日足らずの間に、お年玉になって返ってくる。なんと利回りの良いこと。もし、三が日に落語会でもあるものなら、出会った先輩方からも、お年玉を頂けたはずですが、なんせ寄席もなければ、落語会も少ない時代。そんな恩恵には与りませんでした。

芸歴四十二年になろうという今、私は、お年玉を渡す立場です。あろうことか、四十二年の間に、関西には、天満天神繁昌亭（大阪）、

新開地・喜楽館（神戸）と、常打ちの寄席小屋が二つも出来てしまいました。お正月に寄席へ行くと、若い人たちが、たくさん居ます。普段は勉強しに来たことのないような顔が、何故かウジャウジャと居ります。用意したお年玉袋（現ナマ入り）が、羽が生えたごとく、飛び立って行きます。

寄席小屋が出来たことを、お正月から高座があることを、同業者が頻繁に顔を合わせる環境を、喜ばないといけないのに、こんなボヤキを言ってるから、罰が当たったのでしょ。二館とも、コロナで数カ月の休館に追い込まれました。再開後も市松模様にした、半分の客席数での営業。さらに、楽屋が密にならないように、「用の

無い落語家は来るな」とのお達し。先輩の芸を盗むのが大事な世界で、「勉強しに来るな」で。

さらには、お客様にも、安易に「お越し下さい」とは言えない時代。「体調に不安のある方は、ご遠慮下さい。」入門して四十二年、こんな文言、聞いたことない。見せるためにやってくる芸能で、あり得ない言葉。前代未聞です。

「コロナ」のせいで「来るな」の時代が来ようとは。皆様、お体を大切に。

かつら くじやく

一九七九年三月、桂枝雀に入門。マイクロフォンを使う必要のない会場で、生の声、生の三味線、生の鳴物による落語会の開催に力を入れている。奈良県王寺町「子ども落語教室」、NHK文化センター「落語講座」をきっかけに、アマチュアへの指導を始め、当時三十人、四十人の生徒がいる。趣味は、将棋（アマチュア三段）・詰将棋創作・クラリネット・ギター。

「アンテナ」 詩のボクシングとの出会い



下尾 仁

周波数を合わせば、いろんな人と出会い繋がるができる。アンテナを高くとって沢山のひと繋がる。

僕がまだ会社勤めをしていた頃、東京への出張があり、宿泊先のホテルでテレビを見ていると、ボクシングのリングの上で青コーナー、赤コーナーに分かれ互いに詩を読みあい、勝敗を決め勝ち上がりていくという何とも面白い番組をやっていた。詩といってもただ読むだけではなく、身体全体を使って表現したりリズムを刻みながら歌のように読み上げたり、言葉じゃないことをずっと言ったり、なんだこれはと僕はテレビに釘付けになってしまった。しばらく見てみると、なんと高知代表として知り合いの息子さんが出てきて、すごいパフォーマンスで詩を読んだ。高知代表ということは、高知でも

予選大会などがあるんだ。機会があれば出てみたいと心に思った。それが「詩のボクシング」との出会いであった。

だが、それから何年も情報がなく、いつぐらいにどこでやっているのかもわからなかった。そんなある日、この文化高知でもお世話になっている高知市文化振興事業団のスタッフから電話があり、急ですが今日、詩のボクシング高知大会があるんですがレフェリーが見つからずお願いしたいですと。

レフェリーといっても詩を読む前に「ファイター」と声をかけるのと勝者の手を上げるだけの簡単なこと、と言われた。まさかあの「詩ボク」に、こんなかたちで参加することになるとは、二つ返事でOKした。

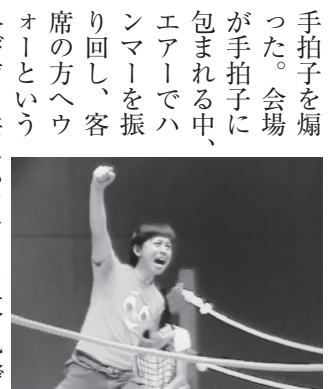
初めて間近で見る詩ボク。一人の持ち時間は三分。面白く引き込まれればあつという間の三分間で

あるが、つまらなければ長く感じる三分。同じ三分なのに違いが出てくる。これは面白い。僕もやっぱり参加しようと強く思った。しかし詩など書いたことのない僕は参加するのにこの大会から三年かかってしまった。

初めて参加した時は本当に緊張した。勝敗の決め方は七人の審査員が青か赤の良かった方の札を上げ札の多い方が勝ち、トーナメントで勝ち上がっていくというルール。この日の僕は緊張はしたものの自分で言うのもなんだが神懸かっていた。何を言ってもお客さんは笑ってくれ、反応がすごく良かったので、やっている僕もノリノリになった。

一回戦「天国か地獄」五対二
二回戦「おまんじゅう」四対三
三回戦「物差し」五対二
と勝ち進み、なんと決勝戦までできてしまった。

決勝は、その場でお題が出され、考える時間もなく即興詩を詠むというスタイル。さあどんなお題が出されるのかと心臓はバクバクといっている。詩ボク（日本朗読ボクシング協会）代表の楠かつのりさんが、一呼吸おいて「ハエ」と言うや否や、カンとゴングの音が会場に響いた。僕は何故かハンマー投げの選手になりきり、観客に



手拍子を煽った。会場が手拍子に包まれる中、エアードハンマーを振り回し、客席の方へウォーという叫び声と共にハンマーを放り投げた。もちろんハンマーなどないが、投げたハンマーに向かって「そのハエに当たれ、そのハエに当たれ、ウォーウォー」絶叫し続けた。そして、「下尾選手優勝です。ひろめ市場で乾杯だ」と締めた。実力も無く勢いだけで決勝まできた僕は、二対五で敗れた。だがあのテレビで見たリングに上がり詩を読む、そしてチャレンジすることにより高知の詩人とも繋がりができ、いい経験になった。でも、ひろめ市場で乾杯だと言った後に、「いやいや祝杯をあげるのはまだ早えーよ」と言いたかった。それがちっちゃな心残りである。

しもお ひとし

一九六九年生まれ。

岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

10～11月の事業から

山村誠一ミュージックショー 祝☆還暦 高知公演

二〇二〇年十一月二十六日（木）、かるぽーと小ホールにて「山村誠一ミュージックショー祝☆還暦 高知公演」を行いました。当初は五月一日に行う予定でしたが、新型コロナウイルスの影響で延期し、ようやく迎えた当日。客席は一席分以上の間隔を空けて配置し、舞台と客席最前列との距離は二メートル、入場時の検温・消毒、連絡先の収集など様々な対策を行いました。公演の頃は高知でもコロナの影響が再度数字に現れ始めた時期で、出演者の県外からの移動、職業柄来場できない方もいるかもしれない、無事に開催できるのか、など心配事も多かったです。そんな中でも、山村誠一さんをはじめとする出演者の皆さんはより良い公演になるよう工夫を凝らし、本番では、演劇仕立てのシーンのほか、グッズのマスクを取り入れた衣装、大阪公演だけ出演する予定だった七弦ギター奏者の山田やーそ裕さんの飛び入り出演など、盛りだくさんの公演内容となりました。有山じゅんじさん、押尾コータローさんと山村さんとのコラボでは、楽しいトークに拍車がかかり、演奏をカットした曲もありましたが、それでも終演時刻が予定より遅くなりました。



てしまうほど盛り上がっていました。アンケートには、公演に来場することが不安な方・全く不安でない方、両方の意見がありました。職業も年齢も生活環境もそれぞれ違う中、皆様のご協力で無事に公演を終えられたことを実感しました。声を出すかわりに手拍子で盛り上がるお客様の楽しそうな様子を見て、定員いっぱいのお客様をお迎えできる日がより待ち遠しくなりました。

（入場者数八十七名）

高知市文化振興事業団サポーターズクラブのご案内

Cul^{カル}チャーず

多くの方の入会をお待ちしております。私たちの文化を、一緒に創りましょう！

特典 ①年間1公演招待 ②公演チケットの割引販売 ③横山隆一記念まんが館企画展招待 ④「文化高知」の送付
会費 1年間3,000円（4月1日～3月31日、年度途中での入会でも3月31日まで）

お申し込み・お問い合わせは、高知市文化振興事業団 088-883-5071 まで

高知市文化振興事業団

二〇二〇年秋冬の市民講座

十月に秋冬の市民講座「朝活坐禅のすすめ」を四回にわたって実施した。講師には宗安禅寺住職の藤原明源和尚をお招きした。

宗安禅寺は、高知市宗安寺にある、禅宗の一つ、臨済宗の大本山妙心寺派の仏教寺院だ。鏡川の上流から流れてきた不動明王を川の畔の現在地に祀ったことが起源と伝えられている。別称を川上不動といい、四国三十六不動第十七番札所に定められ、地元では「お不動さん」と親しまれている。藤原和尚はその第十五代目の住職だ。坐禅のスペシャリストを講師としているがこの講座の魅力はそれだけではない。なんと、椅子でも坐禅が体験できるのだ。

藤原和尚いわく、「坐禅は限られた人だけのものではなく、だれもが気軽に取り組めるものでなければならぬ」ということで、以前からあるやり方ようだ。この方法であれば、正座の苦手な方や足腰の悪い方でも参加が可能で、

この講座を担当した私も含め、今まで「坐禅＝正座」と考えていて坐禅に興味があっても諦めていた方にとっては嬉しい情報だろう。

講座の主な流れは「坐禅↓休憩↓坐禅↓休憩↓坐禅↓お話し」。最初の坐禅は五分間ほどだったが、後半では二十五分の坐禅も行った。長く感じるかもしれないが、通常は線香が一本燃え尽きるまでの時間（約四十五分間）行うので、その半分と思えば多少は楽に感じられる。そして坐禅の醍醐味といえば、皆さんも一度はテレビなどで見たことのある、木の棒で肩の辺りを叩かれることを想像するのではないだろうか。

あの木の棒の正式名称は警策（きさく）といい（「けいさく」とも）、叩き方（打ち方）は宗派などによっていろいろ違うようだ。宗安禅寺では、打たれる人が背中を丸めて前傾になり、その肩甲骨の辺りを打つようになっている。また打つ回数も季節によって服装が薄着や厚

着になることを考慮して、夏は二回、冬は四回と変えている（今回は十月の開催ということで二回だった）。

喝をいれてもらうために希望する人や、雑念があると和尚が判断した人が打たれる仕組みだが、今回は初めて体験する方が多いため、藤原和尚が全員を警策で打って回っていた。私も受講生に交じって体験してみても、坐禅慣れしていない人にとって最大の敵は睡魔ではないかと考えるに至った。そして警策が与える適度な衝撃と音は、それらを払うのに最適なのだと身に染みて感じる事ができた。

「バシーン！バシーン！」



と警策で打つ音、開始と終了の合図に鳴らされる神楽鈴の「シャリンシャリン」という音、拍子木の「カン！カン！」という乾いた音など、坐禅の時間にはいろいろな音が聞こえるのも新たな発見だった。新型コロナウイルス感染拡大防止のためにドアや窓を開け放していることもあり、中央公民館では普段聞こえないような音が共有スペースにまで聞こえたようで、二、三人のお客様から「何の音？」と質問されたことも印象的だった。「姿勢を調え、呼吸を調え、そして心を調え、坐禅に没頭する。」藤原和尚の坐禅の精神についてのお言葉だ。坐禅は集中力を身に付けたり、心を穏やかにすることでストレスを軽減する効果が期待できる。これは、慌ただしく過ぎし心の余裕が少なくなりがちな現代の人々には、なにより必要なことではないだろうか。

「隙間時間」でも坐禅に身を置いてみると、物事に捉われない「無我」の時間を感じることができるので、ぜひ一度は坐禅の体験をしてみてほしい。

〈参加者数 百二十八名うち「朝活坐禅のすすめ」は二十名〉



高知を撮る

第36回写真コンテスト入賞作品

吹雪…めげず！

(平成31年1月26日 大豊町中屋付近)

小笠原 武明

線路は続くよどこまでも 鉄道唱歌の一節でもあるが、目の前の鉄道も北海道から九州南端まで継っているのだと、変なロマンにふける。吹雪のなか今日も岡山行き特急南風はほぼ定刻に通過して行きました。

「公文書の改ざん」が、国会で追及されている。

たまたま読んだ二つの小説の中に、この問題の恐るべき「意味」が描き込まれていて、衝撃を受けた。

ジョージ・オーウェルの、『動物農場』と『一九八四年』である。両者とも典型的なディストピア小説である。『ディストピア』は「逆ユートピア」のことで、絶望的な世界を描いた恐ろしい物語である。

『動物農場』は、「革命」によって人間の支配を脱した家畜たちが、自分たちの理想の共和国をつくる話である。

ところが、「自治」が機能せず、ナポレオンという一匹の雄豚によって支配される独裁国家が生まれてしまう。

『一九八四年』は、核戦争後に生まれた全体主義国家の異常な監視システムのもとで苦悩する主人公が描かれる。

両者には共通点がある。ディストピアを支配する権力は、どちらも初期には一種の「正当性」を持っていた。両者とも「危機管理」から始まっているため、成員を危険から保護するという正当な理由があったのだ。

ディストピア文学



風俗歳時記

ところが「権力」は、ある時点から質を変える。成員の保護ではなく、権力それ自体の維持と拡大が自己目的化するのだ。ここからディストピアの形成が始まる。「危機管理」が「権力の自己目的化」に変わる境界にあるのは、「過去の改ざん」である。

『動物農場』には、革命後に公布された七戒（七つの憲章）があった。

動物たちの権利を擁護したものだ。だが、

雄豚ナポレオンは憲章に反して権力を濫用し始める。なにかおかしい、ということと動物たちが（壁に書かれた）七戒を

確認に行ってみると、すでに憲章は別の言葉に（微妙に）書き換えられている。

『一九八四年』では、主人公は「真理省」に勤務し、毎日過去の新聞記事や雑誌の書き換えを行っている。政治家の発言と矛盾する言葉や記事は、全て印刷ミスであるとされ、「削除」もしくは「訂正」されるのである。

背筋の寒くなる物語だ。日本で今起きている現実にはディストピアが透けて見えるのは錯覚だろうか。

(本の虫)




桂九雀・桂文我 落語会

文我師匠による子どもも楽しい落語会と、九雀師匠による落語会のほか、九雀師匠に指導を受けた落語ワークショップ参加者による発表会を開催します。

日 時：2021年3月7日（日）13:30 開場 14:00 開演
会 場：高知市文化プラザ かるぽーと 小ホール
入場料：一般 2,000 円、高校生以下 1,000 円 ※当日券は各 500 円増
主催・お問い合わせ：公益財団法人高知市文化振興事業団 088-883-5071
左：桂文我 / 撮影・御堂義典 右：桂九雀 / 撮影・佐藤浩

風伯

「ツアイガルニク効果」

我が「〇〇リスト」の未決が次第に増えていて落ち着かない。これは「ツアイガルニク効果」というようで、人は達成できたことより未解決のことをよく覚えていて、それが緊張感やストレスになるといふもの。それを地で行っている私は「効果」というより「症候群」の方がピッタリくる。

私はネット情報も写真や本棚の本、

前回ひとつだけネット上の情報元を取り上げた。ひとつというのはフエアではなかったが、ネット上では、すでに真実を探れないことを知って欲しかった。マスメディアでは新しいアメリカ大統領が決まったかのような報道をしているが、これほど揉めていると令和三年一月六日まで分らない。今回はそんな世界の喧噪から離れ...

原本が必要な書類以外データ化してクラウド上においてある。データ量が増え收拾がつかなくなっていて、身辺は片付いても頭のなかは一向に片付いていない。これも「ツアイガルニク効果」現象なのだろうか。最期には消去ボタンを押せば片付く話だが、この頭のモヤモヤを消すのは最期を待たず消去ボタンを押せばいい。でもやはり決断が...。

アイゼンハワー大統領がよいことを言っている。緊急な事と重要な事の二種類の問題を抱えていて「緊急な事柄は重要ではないし、重要な事柄は決して緊急ではない」と。緊急は多くの場合他人との関わりのことであり、本当に重要な事は自分の目標を達成することだ。だから自分の目標に時間と労力をさけたい。タスクも「〇〇もスケジュールも横一線の分類ではなく「重要」度を基準にすれば違った見方ができる。

後期高齢者の我が身にたいした目標もないが、もう一つの分類の有り様を教えられた。

(霖)



イギリス史上最も意外なスパイ
ジョーンの秘密
© TRADEMARK (RED JOAN) LIMITED 2018

第193回
市民映画会
高知市文化プラザ かるぽーと大ホール
1月14日（木）15日（金）

上映時間	ジョーンの秘密 ⑩10:45 ⑫15:10 ⑫19:20
	スペシャルズ! ⑫12:55 ⑫17:10

【入場料】一枚のチケットで両方の作品をご鑑賞できます。
一般 前売券 1,300 円（当日券 1,500 円）
割引 1,000 円（前売・当日とも）
※学生証、養育手帳、障害者手帳等をお持ちの方は割引
【お問い合わせ】高知市文化振興事業団 088-883-5071

スペシャルズ!

～政府が潰そうとした自閉症ケア施設を守った男たちの実話～



© 2019 ADNIP - TEN CINEMA - GAUMONT - TF1 FILMS PRODUCTION - BELGA PRODUCTIONS - QUAD+TEN

今号の表紙

「五輪の希望」

和泉なぎさ

1月号ということで、新春をイメージし、空に咲いた梅の花をモチーフにしました。

花の周りに五輪カラーを彩り、今年に延期になってしまったオリンピックが無事開催されるように希望を込めました。

(いずみ なぎさ / 国際デザイン・ビューティカレッジ1年生)

【対象】

- ① 高知県内に在住する者の学術的著述または他県在住者で高知県に関する事項をテーマとした学術的著述。
- ② 2020年1月1日～12月31日に発行された単行本（発行日は奥付の日付による）。

【推薦】

自薦・他薦を問いません。必要事項を所定の推薦書に記入し、該当図書3部を添えて審査委員会へ提出してください（図書は、申し出により審査後に2部まで返却します）。要綱・推薦書をご希望の方には送付します。また推薦書は、文化振興事業団のホームページからダウンロードできます。
受付締切 2021年1月31日(日)

【表彰】

高知出版学術賞・3点以内に賞状と賞金10万円、特別賞・1点以内に賞状と賞金5万円を贈ります。

【推薦先・お問い合わせ】

〒781-9529 高知市九反田 2-1
(公財) 高知市文化振興事業団内 高知出版学術賞審査委員会
TEL: 088-883-5071 FAX: 088-883-5069
e-mail: kikaku@kfca.jp

第31回

高知出版学術賞

推薦募集

優れた学術研究の振興は、

文化や出版の向上のみならず、広く高知県の発展に貢献します。

「高知出版学術賞」は、当該年における

最も優れた学術出版を顕彰することによって、

学術研究の振興を図り、

県勢の進展に資することを目的としています。



第36回「記録写真部門」～昭和以前の部～特選
昭和39年オリンピック東京大会 聖火リレー
松山久生

このコンテストは、過去から現在に至るまでの高知県内の出来事や風景、人々の暮らしを写真で記録し、高知の様々な表情を伝えるとともに、未来の高知のあるべき姿を考えていこうというものです。優れた作品は、入選作品展にてたくさんの方にご覧いただきます。

第37回

写真コンテスト

どなたでも、一人何点でも応募できます。出品料無料

応募締切

2021年1月31日(日)

発表 3月上旬

高知を撮る
作品募集

テーマ

●記録写真部門

記録性を持った高知県に関する写真

【平成以降の部】（平成以降に撮影されたもの）

【昭和以前の部】（昭和以前に撮影されたもの）

●I LOVE 高知部門

撮影者の好きな高知の風景・風俗等を表現した写真
(2020年1月1日以降に撮影されたもの)

「記録写真部門」については、【平成以降の部】と【昭和以前の部】を設けています。これにより応募作品は2部に分けて審査が行われます。

賞

「記録写真部門」

特選【平成以降の部】、【昭和以前の部】各1点（賞状と賞金3万円）、準特選 部門内で10点以内（賞状と賞金1万円）

「I LOVE 高知部門」

特選2点（賞状と賞金3万円）、準特選 10点以内（賞状と賞金1万円）

※入選作品は両部門合わせて70点以内

発表：3月上旬、出品者に通知

応募要領

- カラー・モノクロともに白や黒の縁の部分を除き、ワイド四ツ切サイズ(254mm×365mm)またはB4サイズ(257mm×364mm)以上
 - 組写真は3枚までで、写真の並び順と組写真であることを明記して下さい。
 - 両部門ともパネル貼りは不要です。
- 詳しい応募要領は高知市文化振興事業団までお問い合わせ下さい。

応募先

高知市文化振興事業団 写真コンテスト係

(月曜休館。祝日・振替休日は開館)

〒781-9529 高知市九反田 2-1

高知市文化かるぽーと 8階

電話 088-883-5071

入選作品展

日時 2021年3月16日(火)～3月21日(日)

午前10時～午後5時

※16日(火)は、午前10時より表彰式を行います。

会場 高知市文化プラザかるぽーと 7階 市民ギャラリー・第4展示室

入場料 入場無料



第36回「I LOVE 高知部門」
準特選
南国土佐を後にして
松木宣博